

2017年6月30日号

リスクフラッシュ 257号(第8巻 第3号)



# Risk Flash No.257 (Vol.8 No.3)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター  
発行責任者：リスク研究センター長 吉田裕司

- 平成29年度 第2回リスク研究センター主催セミナー(井深 陽子氏・慶應義塾大学経済学部) : 佐野洋史・Page 1-2
- 平成29年度 第3回リスク研究センター主催セミナー(宮川 栄一氏・神戸大学大学院経済学研究科) : 吉田裕司・Page 2-4
- 第3回 English Lunch Seminar (経済学科 御崎加代子教授) . . . . . Page 5
- 第1回リスク研究センター主催国際シンポジウム開催 (11/18) . . . . . Page 5
- 次回リスク研究センター主催セミナーのお知らせ . . . . . Page 6

## 平成29年度 第2回リスク研究センター主催セミナー(井深 陽子氏・慶應義塾大学経済学部)

### リスク研究センター 応用経済学(医療分野) セミナー

日 時：平成29年5月11日(木) 16：10～17：10

会 場：滋賀大学 彦根キャンパス セミナー室 I (土魂商才館 3F)

演 題：『Dynamics of Health and the Economy Over Time in Japan

—日本における健康と経済のダイナミクス—

講 師：井深 陽子氏 (慶應義塾大学経済学部 准教授)

### 【講師紹介】

- 2000年 慶應義塾大学経済学部 卒業
- 2002年 慶應義塾大学大学院経済学研究科  
修士課程終了
- 2008年 ラトガース大学 Ph.D(経済学) 取得
- 2008年 イェール大学 公衆衛生大学院  
博士研究員
- 2011年 一橋大学大学院経済学研究科  
国際・公共政策大学院 講師
- 2012年 京都大学大学院薬学研究科 特定准教授
- 2013年 東北大学大学院経済学研究科 准教授
- 2016年 慶應義塾大学経済学部 准教授



### 【講演概要】

マクロ経済状況と国民の健康との関係性については、これまで相反する実証結果が国内外で報告されている。一般的に好景気は国民の健康を良好にすると予想されそうだが、多くの既存研究が、好景気はむしろ個人の健康状態を悪化させる(不景気は個人の健康状態を改善させる)という結果を示している。その理由としては、不景気により失業すると個人の余暇時間が増えて健康状態が良くなる、所得の低下により飲酒量等が減って個人の

健康状態が良くなるなどの可能性が考えられてきた。

日本においても、不況下の労働市場における国民の健康状態等の特徴について実証研究が行われてきたが、健康状態の指標として主に死亡率が用いられていることや、性・年齢等の個人属性の違いによる健康状態の違いを詳細に捉えた分析が行われていないといった課題が残されていた。本講演では、慶應義塾大学経済学部の井深陽子氏により、マクロ経済状況が日本国民の健康状態に与える影響について、死亡率を含む様々な健康指標を用い、かつ国民の性・年齢や雇用形態、労働時間等の個人属性別に分析した成果が報告された。



日本国民の健康状態のデータには、複数年の都道府県別死亡率と約 50 万人の主観的健康感、自覚症状の有無、日常生活での健康上の問題の有無、通院の有無が用いられた。マクロ経済状況には都道府県別失業率が採用され、重回帰分析により各健康指標への影響が確認された。推定結果より、都道府県別失業率の増加は疾患別死亡率や他の健康指標を低下させ、その影響は性・年齢や労働時間により異なることがわかった。すなわち、マクロ経済状況の悪化は、国民の健康状態を短期的に高める可能性が示唆された。

大規模データを用いた医療経済学研究への関心は高く、当日は多数の経済学部・データサイエンス学部の教員と学生が参加した。分析時の工夫や分析結果の解釈について活発な意見交換が行われ、大変盛況なセミナーとなった。

(文責：経済学科准教授 佐野洋史)

## 平成 29 年度 第 3 回リスク研究センター主催セミナー(宮川 栄一氏・神戸大学大学院経済学研究科)

### リスク研究センター ミクロ経済学先端研究セミナー

日 時：平成 29 年 6 月 8 日(木) 16：10～17：10

会 場：滋賀大学 彦根キャンパス 545 共同研究室 (ファイナンス棟 5F)

演 題：『ゲーム理論で教育を分析する』

講 師：宮川 栄一氏 (神戸大学大学院経済学研究科 教授)

### 【講師紹介】

宮川氏は、関西学院大学経済学部を卒業後、神戸大学大学院経済学研究科で修士課程を修了して、米国のロチェスター大学に留学しました。経済学の Ph.D. を取得後、米国のコロンビア大学で Assistant Professor として約 9 年間務めた後、2007 年に母校の神戸大学の教員として戻ってきました。専門はミクロ経済学分野の中でも特にゲーム論の研究がされています。数理的な経済理論分析を専門とする国際学術誌の中で権威のある Journal of Economic Theory(通称、ジェット)に、宮川氏は幾つもの研究論文を掲載しています。

## 【研究背景: ゲーム理論とは】

(ゲーム論を用いない)経済学では、個人の経済行動にしても、企業の経済行動にしても、「ある状況」の下で『最適』な選択をすることが想定されています。例えば、「ある状況」というものが商品や原材料の「価格」であれば、個人や企業は自分の行動を決定する時に、自分の行動によってその価格が変わることは考えません。少し専門的な表現を使えば、価格などの「ある状況」は外生的に決まっていると考えて、そのもとで自分にとっての最適な行動を取ります。ある意味、世界の中で、自分一人だけがどのような行動を取るかを選択しているようなものです。

しかし、ゲーム論では「ある状況」は外生的ではなく、自分のとる行動によって変化すると考えます。世界の中で、どのような行動をとるかを考えているのは自分だけでなく、他にも同じように考えている個人や企業がいるのです。そのため、ゲーム論では少なくとも二人以上のプレイヤーを想定しています。そして、一人のプレイヤーの選択した行動は、もう一人のプレイヤーの行動に影響を与えてしまい、「ある状況」は自分の取る行動に連動して変化してしまいます。このような設定で、最適な行動(ゲーム論では戦略と呼びます)を選択することを考える応用数学がゲーム論です。ナッシュ均衡で有名な John F. Nash Jr. を始め、多くのゲーム理論の研究者がノーベル記念経済学賞を受賞しています。

## 【セミナー内容】

今回のセミナーのテーマは、学生や教員はもちろんのこと、社会人であっても大学に籍を置いたことのある者であれば、誰でも関心を持つテーマでした。それは、『学生はどれだけ勉強に努力を費やし、教員はどのように成績を決定しているか』、という問題でした。このような問題を考えると、あらゆる要因が頭に浮かぶことだと思います。しかし、経済学の理論モデルを構築する時に重要なのは、全ての要因を取り込むことではなく、最も根幹に関わる部分をシンプルな形でモデルとして構築することです。でないと、問題の答え(解)が得られなくなったり、あいまいな答えしか得られなくなってしまいます。

宮川氏が設定したのは、以下の通りです。ある授業において、学生が苦しい勉強に時間をかけて努力するのには、①その科目の単位をとれる喜びと、②自分の能力を向上させることで将来から得られる便益、の二つのためです。しかし、宮川氏の想定する学生は、直ぐに結果が得られる①に対しては正しく評価するのですが、卒業してからの遠い将来に役立つような能力に関しては低く評価してしまいます。これは、行動経済学(behavioral economics)で、現在バイアス(present bias)と呼ばれています。そのため、(コストとベネフィットを正しく評価した)最適の量よりも少ない勉強しかしなくなってしまう。





一方、教員は学生のことを真摯に考えていて、①も②も正しく評価します。できることなら、今すぐのことだけに囚われがちな学生に、将来のためにもっと勉強するように仕向けたいのです。となると、教員にとっての最適な戦略は、学生に将来の能力を高めるために最適な量まで勉強をさせることです(②の上昇)。しかし、採点の時には、既に努力を費やした後ですので、教員が学生の厚生を上げるためには、成績に関係なく合格(①の上昇)させることになってしまいます。ですが、教員には宮川氏が道徳心(モラル)と呼ぶ、テストの悪い点数を取った学生に合格を出すことの心苦しみのコストがあるため、全員を合格とはしません。実際に教員がとる行動は、どこまで(誰まで)を合格にするかの決断となります。ですが、採点時には、もう授業も試験も終わっているため、本来よりも甘い採点となり、合格率が高くなってしまいます。ここまでの分析の結論では、学生は本来よりも努力が過小になり、教員は本来よりも甘い採点をしてしまいます。ここで大事な点は、学生は教員が甘い採点をすることも読み込んで、努力を怠るのです。

どうすれば、この問題を解決できるのでしょうか?宮川氏が提唱している方法は、大学として事前に合格率(例えば、80%)を設定して、学生に通知をします。そして、教員は採点時に、その事前に設定された合格率以上の学生を合格することを許されません。このようにすると、学生は甘い採点に期待が出来ないため、より多くの勉強に努力を費やし、結果として学生の将来に役立つ能力も向上します。



さて、幾つかの疑問点が考えられます。理論モデルからは理想の合格率は明確に示されています。しかし、それは観測できない理論モデルのパラメータを多く含んでいます。実際の合格率をどのように設定すれば良いのかは、導入時に非常に難しい問題となります。しかし、多くの学生が欠席しがちの大講義で、全員に近い人数が合格する授業というのは、教員のモラルが欠落しているのが原因であると宮川氏の理論モデルからは示唆されます。そのような講義に関しては、合格率

の規制も有効でしょう。(もちろん、そのような講義は滋賀大学経済学部には無いと信じていたのですが…。笑。)

私と同様に多くの皆さんも、いろんな疑問や問題点が頭に浮かんでくることだと思います。しかし、新しい経済理論というのは最もシンプルなところからスタートして、そこから少しずつ進歩していくのです。他の多くの研究者から何百回と引用される研究論文というものには、得てしてそういうものが多いものです。今後の宮川氏の研究の発展と、日本の大学における教育効果の向上に期待して、本文を締めさせていただきます。

(文責：ファイナンス学科教授 吉田裕司)

## 第3回 English Lunch Seminar(経済学科 御崎加代子教授)

平成29年6月15日(木)、第3回リスク研究センター主催 English Lunch Seminar を開催致しました。今回は、本学の経済学科 御崎加代子教授による「レオン・ワルラスの一般均衡理論」が「アダム・スミスの『国富論』」からどのように影響を受けたかについての研究報告がありました。御崎氏はスイスに渡り、ワルラスが直筆で『国富論』に書き残したメモ(フランス語)を読み取ることで、二人の経済学者の思想的な関係を明らかにしました。インターネットで何でも検索する時代に、研究者の地道な努力に研究の原点を見るようで、本当に感服いたしました。



次回の English Lunch Seminar は7月13日開催予定です。学内の教員・学生の方ならどなたでも参加可能です→【案内】<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/5/14:10>

## 第1回リスク研究センター主催国際シンポジウム開催(11/18)

今年の1月に京都・彦根で開催した国際シンポジウム(The 12th ICAFM)に引き続き、平成29年11月18日(土)、第1回リスク研究センター主催国際シンポジウム「The 1st International Conference on Risk in Economics and Society, Shiga University」(通称、RESSU)を彦根キャンパス士魂商才館にて開催予定です。

今年のテーマは「Asian Economies in the Globalized World」です。

現在、発表論文を募集中です。締め切りは8月18日です。

詳しくはこちらをご覧ください。

<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/RESSU/>



## 次回リスク研究センター主催セミナーのお知らせ

平成 29 年 7 月 6 日 (木)、リスク研究センターでは、東京大学大学院経済学研究科より、青木 浩介教授をお迎えして、平成 29 年度 第 5 回リスク研究センター主催 マクロ先端研究セミナーを開催する予定です。

日 時：平成 29 年 7 月 6 日 (木) 16 : 10 ~ 17 : 10

会 場：滋賀大学 彦根キャンパス セミナー室 I (土魂商才館 3F)

演 題：『Monetary and Financial Policies in Emerging Markets  
—新興国のための金融政策と金融規制—』

講 師：青木 浩介氏 (東京大学大学院経済学研究科 教授)

◆学内・学外を問わず参加を歓迎します。参加ご希望の方は、下記 HP 内の申込フォーム  
をご利用ください。

<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/5/14:2>

平成 29 年度第 5 回  
リスク研究センター主催 マクロ先端研究セミナー  
『Monetary and Financial Policies in Emerging Markets  
—新興国のための金融政策と金融規制—』

滋賀大学リスク研究センターが提供する研究セミナーの平成 29 年度第 5 弾は、東京大学大学院経済学研究科より、青木 浩介教授をお招きして、『Monetary and Financial Policies in Emerging Markets—新興国のための金融政策と金融規制—』と題したマクロ先端研究セミナーを行います。

講師：青木 浩介 氏 (東京大学大学院経済学研究科 教授)

《講師紹介》

1992 年 神戸大学経済学部卒業  
1994 年 神戸大学大学院経済学研究科前期課程修了  
2000 年 プリンストン大学 Ph.D (Economics)  
2004 年 LSE (London School of Economics) 講師  
2011 年 東京大学大学院経済学研究科准教授

主な研究の御実績

“Optimal Monetary Policy Response to Relative Price Changes,”  
Journal of Monetary Economics 48, 2001, pp55-80  
“On the Optimal Monetary Policy Response to Noisy Indicators,”  
Journal of Monetary Economics 50, 2003, pp501-523  
“House prices, consumption, and monetary policy: a financial accelerator approach,”  
Journal of Financial Intermediation 13(4), 2004, pp 414-435  
(James Proudman and Gertjan Vlieghe)

- ◇日時◇ 平成29年7月6日 16:10~17:10
- ◇会場◇ 滋賀大学彦根キャンパス セミナー室 I  
(土魂商才館3F)
- ◇申込◇ リスク研 HP→セミナー講演会一覧よりお申込下さい

主催：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター



### 「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

#### 【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

#### 【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

#### 【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

#### 【免責事項】

1. 配信メールが回線上的問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

#### 【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

\*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

( <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3:12> )

発行：滋賀大学経済学部 附属リスク研究センター

編集委員：吉田裕司、金秉基、石井利江子、近藤豊将、佐野洋史、  
竹村幸祐、藤井孝之、森宏一郎

事務補佐員：山崎真理、萩原多恵子

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局（Office Hours:月一金 13:00-17:00）

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: [risk@biwako.shiga-u.ac.jp](mailto:risk@biwako.shiga-u.ac.jp)

Web page : <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>